



マルグリッド・ドウ・ナヴァール『エプタメロン』
の構成について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00009996

マルグリット・ドゥ・ナヴァール 『エプタメロン』の構成について

鍛 治 義 弘

16世紀前半のフランスにおいては短い話を集めた形式の物語集が非常に流行したが、フランソワ I 世の姉であり宗教的な詩や劇作を書いたマルグリット・ドゥ・ナヴァールもこの種の作品を残した。1549年の彼女の死によって未完のままに終わった作品は、1558年に Pierre Boaistuau によって *Histoires des Amans fortunés* という題で出版されたが、この版は編者の恣意的な取捨選択によるもので、翌年には Claude Gruget による「最初の印刷では混乱していたのを正しい順序に直した」*L'Heptaméron des Nouvelles de Très illustres et très excellente Princesse Marguerite de Valois, Royne de Navarre* として印刷刊行され、今日では『エプタメロン』と呼ばれている。

『エプタメロン』は、こうした形式の原型であるボッカチョの『デカメロン』にもっとも近い形式を取っている。いわゆる枠物語と言われるもので、序詞（プロローグ）で物語の語られる状況が設定された後、幾人かの語り手（*devisant*）が一日に一話ずつ語り、それが何日か続くというものである。従来の『エプタメロン』研究は、Pierre Jourdaの浩瀚な書物に代表されるような¹⁾、語り手の背後にモデルとなった歴史的人物を探り、話の源泉を求めることが中心であったが、M.M. de la Garanderie²⁾の研究によって、対話や語り方などの構成に焦点が当てられるようになった。我々はこうした構成の観点から今一度『エプタメロン』の意図を検討してみたい。

プロローグ

我々はまず全体の枠組みを作り出している序詞の分析から始めることにす

る。というのも、16世紀にあっては、しばしば序詞と本文が極めて密接な関係を持ち、いわばマイクロコスモスとマクロコスモスとして対応するからで、我々自身もラブレーとデ・ペリエの作品についてこうした関係を論じたことがあるし⁹⁾、『エプタメロン』についても、既に C-G. Dubois⁹⁾ や Ph. de Lajarte⁹⁾ が論じている。

さて、『エプタメロン』において序詞のもつ第一の機能は、『デカメロン』と同様、語り手たちの導入とそれぞれの話の語られる全体的状況を設定することで、マルグリット・ドゥ・ナヴァールは、9月初頭ピレネー山中の温泉に治療にやって来た貴族・貴婦人達（オワジーユ、イルカン、パルラマンテ、ロンガリーヌ、ダゴンサン、サフルダン、ノメルフィド、エナシュイット、ジェビュロン、シモントー）が、洪水で戻れなくなり、セランスの聖母寺院に集まり、橋が修理されるまで、各人が話をするという枠組を考え出した。マルグリット・ドゥ・ナヴァール自身の体験に基づくとも思われるこの枠組は、手本となった『デカメロン』と比べると、いくつかの点で興味深い。まず語り手たちが集まる原因となった洪水は一応の現実性をもってはいるが、山賊と戦ったり、熊に襲われたりするくだりは、情景や人物の描写がまことに簡略で、『デカメロン』のベストの描写に比べると、まるで現実味がない。また H.H. Wetzel が指摘するように¹⁰⁾、ここに集まった語り手たちが、ボッカチョにおけるようなフィレンツェ市民ではなく、勃興しつつあったフランス王権を支える貴族であることと、『デカメロン』とは異なり、語り手の男女比が5対5で同率であることにも注意しておこう。

しかし何よりも大きな相違は、パルラマンテが物語をして楽しみ、暇をつぶすことを提案した部分に見られる。

Parlamanté voiant que le sor du jeu étoit tombé sur elle, leur dit ainsi: Si je me sentoi aussi suffisente que les anciens, qui ont trouvez les arts, je inuenteroie quelque jeu ou passetems pour satisfaire à la charge que me donnez. Mais connoissant mon sçauoir et ma puissance

qui à péne peut rémémorer les choses bien faites, je me tiendrai tresheureuse d'ensuyure de près ceus qui ont desiâ satisfait à votre demande. Entre autres, je croi qu'il n'y a nul de vous qui n'ait leu les cent nouvelles de Jan Bocace nouvellement traduites d'Italian en françoys, desquelles le Roy treschretien Françoys, prémier de ce nom, Monseigneur le Dauphin, ma Dame la Dauphine, ma Dame Marguerite ont fait tant de cas, que si Bocace du lieu où il étoit les eut peu oÿr, il deuoit ressuciter à la louange de telles personnes. A l'heure j'oÿ les deus Dames dessus nommees, et plusieurs autres de la cour qui se délibérèrent d'en faire autant, si non en une chose différente de Bocace: c'est de n'écrire nouvelle qui ne soit véritable histoire. Et promeirent lesdites dames et Monseigneur le Dauphin avec elles, d'en faire chacun dys et d'assembler jusques à dys personnes qu'ilz pensoient plus digne de raconter quelque chose, sauf ceus qui auoient étudié et étoient gentz de lettres. Car Monseigneur le Dauphin ne vouloit que leur art y fut mêlé; et aussi de peur que la beauté de la rhétorique fait tor en quelque partie à la vérité de l'histoire.(中略) Et s'il vous plait que tous les jours depuis midy jusques à quatre heures nous alons dans ce beau pré, (中略) chacun dira quelque histoire qu'il aura veue, ou bien oÿe dire à quelque homme digne de foy. Au bout des dys jours aurons peracheué la centéne.⁷⁾

ここで話題となっている新しくフランス語に直された『デカメロン』とは、Antoine le Maçonにより1545年に翻訳出版されたものを指し、翻訳者自身が序に付した書簡でこの翻訳がマルグリット・ドゥ・ナヴァールの命であったことを証言している⁸⁾。パルラマンテの言うところでは、この新訳がフランソワ I 世、マルグリット、王太子（アンリ）、王太子妃（カトリーヌ・ドゥ・メディシス）たちの間で大評判となったので、マルグリットと王太子妃の二

人の女性が宮廷の仲間と、同様のものを作ろうと決心したのだ。しかしその際には『デカメロン』と異なり、「本当の」話しか書かないことにし、そのため文筆家の技巧や修辞は退けられることになっていたという。パルラマンテは、上記の箇所では略した理由により挫折した計画を、遊戯または気晴らしとしてそのまま行おうと提案し、「本当の」話だけを語るように、語り手自身が見たか、信頼できる人に語られるのを聞いた話を語ろうというのだ。ここで繰り返される「真実性」<<vérité>>こそが、『エプタメロン』の一つの特徴をなしている。実際、語り手は話をするとき、何度となく「本当の」話であることに言及することになる。

しかし、この決定に至るまでの経過も重要である。橋が直るまでの気晴らしは、各人が話をするだけでないからだ。パルラマンテによって、母親代わりと形容されたオワジーユがまず、毎朝一時間聖書を読み聞かせることになっているのであり、この提案は一同に受け入れられたが、イルカンがそれでは不足だと意見を述べて、最終的にパルラマンテの案に従うこととなったのだ。したがって毎朝午前中はオワジーユの聖書講読を一同で聞き、午後話をするようになる。その際は、『デカメロン』のように、その日その日で女王や王を選び、その人物が話の主題を設定することはない。その意味で、午前中を支配するオワジーユに当面の権威が想定されている。また先述した通り、この決定に至るまでにはイルカンの異論が唱えられ、議論の様相も見えるのだ。この議論もまた話とならんで『エプタメロン』の特徴となるものだ。

さらには、セランスの聖母寺院の僧院長の偽善者ぶりや吝嗇への言及は、オワジーユの福音主義的な姿勢と好対照をなし、この物語集の各話の大きなテーマの一つである修道士批判を予告しているともとれる。

以上のように『エプタメロン』にあっても、序詞は以後語られる物語と緊密に関係し、構成やテーマを予想させるものとなっている。

基本構造

M. Jeanneret は最近の論文⁹⁾で、『エプタメロン』がモジュールを基本構造とすると述べている。彼の基本的観察は次の四点である。1) 『エプタメロン』は長い語り形式よりも短いノヴェッラ (ヌーヴェル) 形式からなる。2) これらのノヴェッラを集めて一つの本ができている。3) 各話にはコメントがついている。4) 各語り手の解釈は一致しない。たしかに、『エプタメロン』はこのような形式をとっているが、より詳細に見るならば、次のような形式であると言えよう。先程の序詞分析で見たように、各日はオワジーユの聖書購読で始まるが、食後牧場で語り手たちが集まると、だれかが口を切り (第一日はシモントー)、だれかが指名されると、その語り手は話の目的や種類を明らかにする前置きをして、話を始める。話はその語り手だけによって語られ、他の語り手や、ナラトゥール¹⁰⁾が介入することはない。話が終わると、語り手は、<<Voilà, mes Dames,...>>を典型とする締めくくりを行うが、その際自分の個人的見解を付け加えることも多い。次に他の語り手がこの話についてコメントを加え、話し手間で対話が始まり、議論に発展することもしばしばである。コメントや議論は大抵、一致を見ず、先の語り手が次の語り手を指名し、一日に十話が語られると、その日は終わり、翌日同様にしてまた話が始まる。またこの構造を語りの審級の面から見れば、次のようになっている。まず基層としてナラトゥールの語る部分がある。序詞と各日の出だしおよびいくつかの話のつなぎの部分で、ナラトゥールが読者<<vous>>をともなって<<je>>として姿を現すのは序詞と第四日第十話¹¹⁾の対話の部分でだけである。この基層の上に、各語り手が語る話と、語り手の対話を直接話法で再現した部分がある。話のなかには、VI.6, VI.7, VII.2などのように、語り手が話を聞いた状況を記したり、また登場人物がさらに話を聞く場面を導入したりして、いわば二重の語りになっているものもあるが、視点はあくまでも各語り手のものである。語り手も聞き手<<vous>>とともに<<je>>として現れることも間々ある。さらに各話の登場人物が直接話法で話をする部分をこれら二層の上に想定できよう。

問題はこれらの構造が何を意味しているか、どのような機能を果たしているかであり、まずは序詞で指摘した『エブタメロン』の一つの特徴である、<<vérité>>の問題から始めよう。

<<vérité>>

既に見たように、序詞で『エブタメロン』の話は「本当」のものだと主張されたし、多くの研究者は「本当」だと見なしてきた。この場合「本当」とは、歴史的事実ということである。たしかに、話の中には、II.2で語られる著名なロレンザッチョの話のように歴史的事実に合致するものもあり、作者マルグリット・ドゥ・ナヴァールやフランソワ I 世、その他ヴァロワ王権のまわりにいた貴族などが登場人物となることも多い。また各語り手が「本当」と幾度となく主張し、別の語り手が、登場人物を知っていると保証の言葉をさしはさむこともある。しかし、VI.10の「ヴェルジー城主の奥方」は、語り手ははっきり言明しているように、昔に書かれたものであり、歴史的事実とは考えにくい。また、事実性を保証すべき時・場所・人物名は必ずしも全てが明らかにされず、登場人物のプライバシーを守るためという理由で、名前を変えることもある。そして、I.8のように、『デカメロン』や『サン・ヌーヴェル・ヌーヴェル』に既に見られた伝統的テーマを、人物や場所を改めて語ったとも思われかねないものも存在する。さらに、いくら歴史的事実に基づいていたとしても、今日ではすべてを実証することは不可能であるので、我々は別の角度から問題を検討しよう。

序詞で述べられているように、語り手は皆貴族・貴婦人であり、登場人物も同様の階級に属するものが大多数である。しかも語り手たちは、全員<<honnette>>であることになっている。この貴族社会は、名誉<<honneur>>が支配する社会とされているが、この名誉に<<honnette>>であることが加わると、別の特徴が生まれる。

Et vous dirai que la chose dont lon doit moins user sans extrême

nécessité, est mensonge ou dissimulation, qui est un vice bien laid et infame, principalement aus Princes et grans seigneurs en la bouche et contenance desquelz la vérité est mieus séante qu'en autre lieu.(p.176)

これはロンガリーヌの言明であるが、嘘やごまかしに対して<<vérité>>こそ王侯、大貴族にもっとも相応しいものとされている。またシモントーに言わせれば、信用は階級によって差があり、卑しい身分の者は信用度が低い¹²⁾。またそれだからこそ序詞では信用できる人と言及されたのであった。従って、各話が歴史的事実であっても一向差し支えないが、その「真実性」は、このような貴族が「事実」を話すと決めたから保証されると考えるべきで、いわばゲームの規則なのである。それ故、奥方が馬丁に抱かれるなどは信じ難いと思っても、オワジーユは次のように言わざるを得ない。

Vrayement, dit Oysille, vous l'auez gardée bonne pour la fin de la journée. Et n'étoit que nous auons tous juré de dire vérité, je ne sçauroie croire qu'une femme de l'état dont elle étoit, sceut ettre si méchante de l'ame, quant à Dieu, et de cors, laissant un si honette gentihomme, pour un si vilain muletier.(p.136)

そしてこの「本当のことを話すという約束」にあたる表現は、幾度となく、オワジーユだけでなくパルラマンテやジェビュロンの口からも繰り返されている。このように、話は「本当」のものとして受け取るよう、少なくとも語り手の間では、了解されているのだ。

議 論

それでは何故話は「本当」でなければならないのか。それに答えるためには、基本構造に立ち戻る必要がある。

先述したように、『エプタメロン』は同じ短い話の集成ではあっても、『デカメロン』とは異なり、各話の後に語り手の直接対話形式の議論がある。

この議論は、次の語り手を指名するためにも必要であるが、それ以上にこの議論を通じて、各語り手の個性が明らかにされていくのだ。『エプタメロン』の人物描写は、各物語にあっても、序詞や各日のつなぎの部分においても、美人、金持ち、正直などの、ごく抽象的なレベルに留まっている。しかし、物語ではさまざま行動によって登場人物が提示されている。語り手はこのような行動をする余地が与えられていない。従って、語り手を単なる狂言回しとしないためには、対話によってどのような考え方をしているのか、次第に明らかにすることが必要なのだ。

十人の語り手は、文字通り十人十色で、各々個性が違い、問題によってとる立場も異なるが、最大の問題と思われる女性の名誉に関しは、Ⅲ.6の後に行われる次の議論が両極を示している。

Vous me la pindrez, dit Hircain, comme il vous plaira, mais je sçai bien qu'un pire Diable met tousiours l'autre dehors, et que l'orgueil <chasse> plus la volupté entre les dames, que la crainte ne fait, ny l'amour de Dieu; aussi que leurs robes sont si longues, et si bien tissues de dissimulation, que lon ne peut connoitre ce qui est de souz. Car si leur honneur n'en étoit non plus taché que le notre, vous trouueriez que nature n'a rien oublyé en elles non plus qu'en nous, et pour la contrainte qu'elles se font de n'auser prendre le plaisir qu'elles desirent; ont changé ce vice en un plus grand qu'elles tiennent plus honnette: c'est une gloire et cruauté, par laquelle espèrent d'aquerir nom d'immortalité, et ainsi se glorifiantes de résister au vice de la loy de nature, si nature est vicieuse, se font non seulement semblables aus bestes inhumaines et cruelles, mais aus Diables desquelz elles prénent l'orgueil et la malice. (中略) Je sçai bien, dit Parlamanté que nous auons tous besoin de la grace de Dieu pour ce que nous sommes tous enclins à péché, si est ce que noz tentations ne sont pareilles

aus votres. Et si nous péchons par orgueil, nul tiers n'en a dommage, ne notre cors, ne noz biens n'en demeurent souilleez, mais votre plaisir git à deshonorer les femmes, et votre honneur à tuer les hommes en guerre, qui sont deus pointz formellement contraires à la loy de Dieu. (pp.190-191)

イルカンとパルラマンテは夫婦なのだが、こと女性の名誉にかけては真っ向から対立している。イルカンによれば、快楽を求めるのは「自然の法」なのであって、女性はこの法を認めず、自分の虚栄心のために快楽を拒み、傲慢や残酷の悪徳におちいって、男性の求愛に応じないのだ。この主張に、よってたつ根拠は少し異なるものの、サフルダンやシモントーの男性陣が同調している。一方パルラマンテから見れば、男性が女性を求めるのは、専ら自らの快楽を満足させるためであり、そのことで女性の名誉を汚し、「神の法」を犯している。この女性の名誉を擁護し、盛んに男性を攻撃するのがオワジーユやエナシュイットの女性陣で、男性ではジェビュロンがこの立場に近い。

また兄の承認を得ず、内密で結婚したジョスラン伯の妹の顛末を語るIV. 10の後の議論では、社会の掟を重視する立場のパルラマンテ、オワジーユ、イルカン、ジェビュロンに対して、ノメルフィド、ダゴンサン、シモントー、サフルダンは個人の愛や美德を擁護している。

このように、十人の語り手はそれぞれの立場があり、語られた話に自らの観点からコメントを加えるのだが、同時に語る話は各自の主張に沿ったものとなる場合が多い。というのも主張がよく理解され、説得的なものとなるためには、パルラマンテが<<Car votre propos est de si petite autorité, qu'il a besoin d'etre fortifié d'exemple.>>(p.303)と言うように、実例が必要だからだ。

全ての話がある主張のためという訳ではない。ノメルフィドの語る話はどれも短く、愉快で笑いを誘うものが多い。しかし大多数の話は各語り手の種々の題材に対する見解を披瀝するためのものであり、それだからこそ、語り手

は話の前口上で語る目的を述べ、締めくくりでは自らの見地を今一度確認し、聞き手<<mes Dames>>に訴えかけるのである。しかし、主張の裏付けとなるべき話が架空のものであれば、それは語り手にとっても聞き手にとっても、なんら説得力をもたないだろう。それ故、話は実例でなければならず、「本当」であることをお互いに納得しておかなければならない。語り手の語る話の世界は嘘mensonge, 偽りdissimulation, 欺瞞tromperieに満ちあふれているが、語り手自身がこの種の罠にはまり込むことは決してなく、初めから登場人物の世界を見透かす神の視点にたっているのも、それが「事実」でなければならぬからだ。

こうして『エプタメロン』にあっては、語り手は「事実」を語り、それを基に自説を主張し、また自説の主張のために実例を語る。しかし各自の話に別の語り手は、別のコメントを付し、その説を擁護するための話をする。M. Jeanneretの言うように、各語り手の解釈は一致せず、それが物語り全体を進めて行く機能をも果たしている。

Jeanneretは、さらに踏み込んで、モジュール形式の意味を次のように説明している。まず彼は、16世紀に長編のロマンが稀で短編の集成が多いのを、1530年頃から1590年頃までは長い作品に必要な社会的安定を欠いていたこと、ルネサンス期には短い形式を好む趣味があり、ディスクールを限定された可動性の単位に分割する傾向が存在したこと、活字印刷の発展に伴う口承形態から書物形式への変化が直線的語りからモジュール形式の語りの流行に導いたこと、によると説明する。更に印刷物の流通により、物語が個人的に消費されるようになった結果、解釈におけるコンセンサスが消失し、中世の唯一の真理を求めるキリスト教的解釈学が問題となるに及んで、短い話は即座の明示的な考察へ導くことが容易なので、多様な読みの実験場としてのモジュール形式が登場したと言う。そこでは、以前は作者にだけあった権威が読者と分有され、人間の直感と経験的知識による信用が求められる。16世紀の物語で読者像が間々見られるのは他の読み方を示すためである。こうして『エプタメロン』に見られるモジュール形式は、解釈の多様性を反映したもので、

寄せ集めの分割された当時の宇宙像を表現するに最も適した形式であったとするのだ。大きな観点からは刺激に満ちた示唆されることも多い論ではあるが、『エプタメロン』に限って、また『エプタメロン』を詳細に検討してみると、はなはだ疑問と言わざるを得ない。

ストラテジー

『エプタメロン』に現れた思想を、マルグリット・ドゥ・ナヴァールの伝記的事実や他の詩や劇に表現されたものとの関連で理解し、パルラマンテやオワジーユを作者の代弁者と考えることは一つの有効な方法であるが、既に行われていることでもあり、我々はこれまでたどってきた形式面から検討を進めよう。先に引用したde la Garanderieは、語り手の対話とその物語る話を検討し、語り手を完全に自律的な登場人物で同等の役割を果たしているとしたうえで、オワジーユにだけ「ゲームに参加するだけでなく、規制し、主宰する」役割を認め、各日がオワジーユの聖書講読で始まり、日が経つごとに他の語り手たちの聖書講読やミサにたいする楽しみが増大していることから、『エプタメロン』をオワジーユによる他の語り手たちを福音主義的キリスト教に回心させる物語と見なした。オワジーユの果たす役割があまり具体的に分析されていないのがやや惜しまれるが、卓見である。しかし、語り手の中で特別な役割を担っているのは、オワジーユだけなのだろうか。

de la Garanderie自身も、パルラマンテについて、ゲームを最初に思いつき、前日までのやり方とは異なり八日目の主題を設定するなどの、他の語り手との違いには言及している。しかし、不思議なことにそれ以上の分析がない。序詞で言及された挫折した計画でも二人の宮廷婦人が中心となっていたように、我々の目にはパルラマンテもオワジーユと並んで特別な役割を果たしているように思われる。今挙げた理由の外に、パルラマンテはオワジーユとともに、VII. 10のヴェルジー城主の奥方の話を知っていたただ二人の人物の一方であったし、また語り手の点でも、常に長い話をするだけでなく、VI. 10はII. 1を時間的に溯ったものであり、更には一日の最後の話を二回語る唯

一の語り手である。このようにパルラマンテは他の語り手よりも抜きん出た地位を占めているが、さらに対話のなかに次のような条が見られる。

Parlamanté dit que Saint Paul n'auoit point oubliez les vices des Italiens et de tous ceus qui cuydent passer et surmonter les autres hommes en prudence et raison humaine, en laquelle ilz se fondent si for, qu'ilz ne rendent point à Dieu la gloire qui luy appertient. Par quoy le Tout Puissant jalous de son honneur, rend plus insensez que les bestes enragées, ceus qui ont cuydé auoir plus de sens que tous les autres hommes, leur faisant montrer par oeuvres contre nature, qu'ilz sont en sens réprouué. Longarine luy rompit la parole pour dire que c'est le troysième péché auquel ilz sont sujetz. Par ma foy, dit Nommerfide, je pren grand plaisir à ce propos.(p.283)

『エプタメロン』における対話は、上記引用末のノメルフィドのように直接話法で行われるのが大部分であるが、最初の文のように間接話法が使われることもなくはない。しかし、<<Par quoy>>で始まる人間の慢心を語る第二の文は、次の文の<<Longarine luy rompit la parole>>からして明らかにパルラマンテの言葉であるはずだが、伝達動詞と接続詞queが省略されている。つまりこの部分は自由間接話法的に使われている。自由間接話法についてここで詳説するには及ぶまいが、この話法が直接話法と間接話法の間形態であり、語り手の叙述と登場人物の主観が相互浸透していることを示すものであるというのは間違いないであろう。先に述べたように、『エプタメロン』において、枠組を語るナラトールは、ほとんど姿をみせず、それゆえ語り手を操作することもなく、各語り手は独立した自律的登場人物の自由を持つとも考え得るし、議論において各語り手の立場を同等とも見なし得たのだが、このようなナラトールとパルラマンテの関係がある以上、パルラマンテの特権的位置を認めざるを得まい。

オワジーユに特別の役割が与えられたのは、一同を福音主義的立場に向けるためであったとすると、パルラマンテの特権的役割は何のためか。パルラマンテはオワジーユと並んで福音主義的姿勢をとっていてもいたが、何より彼女が堅持するのは女性の名誉の擁護である。したがって彼女を通して行われるのは、男性の語り手に女性の名誉を認めさせることであろう。実際、上記引用の後、七日目には、これまで男性の立場から女性の欠点や男性の美德を語って来たシモントーは、VII.7でロベルヴァル隊に同行した犯罪者の妻の徳行を語り、悪口屋のイルカンもVII.9では利口な妻の話をするに至っている。

『エプタメロン』は確かに、Jeanneretの言うようにモジュール構造を備えているが、それは解釈の自由を許すためとは思われない。むしろ日が経つにつれてだんだんとオワジーユとパルラマンテの視点に各語り手が近づいて行くように思われる。未完に終わっているため、これ以上論を進めることはできないが、やはり一種の護教論、かつ女性擁護論の書となっていたのではないだろうか。しかしマルグリット・ドゥ・ナヴァールは、『エプタメロン』を単なる護教論とはしなかった。ジェビュロンの言うように¹³⁾、神の目から見れば、天のした何も新しきものはなくとも、神の摂理を知らぬものには全てが新しく思われ、善と悪が続く限り新しい出来事が生ずるなら、この世界は多様であろう。またサフルダンが気づいているように¹⁴⁾、堅い議論だけでは各対話者もそして読者も退屈するのである。マルグリット・ドゥ・ナヴァールがモジュール形式を用いたのは、多様性を示すと同時に読者を導き、楽しみながら議論を進めるために、最も適した形式であったからではないだろうか。(1996.10.12)

註

- 1) Pierre Jourda, *Marguerite d'Angoulême, Duchesse d'Alençon, Reine de Navarre (1492-1549), Etude biographique et littéraire*, 2vol., Champion, 1930. (Slatkine Reprints, 1978) 『エプタメロン』については、pp. 655-1003.
- 2) Marie-Madeleine de la Garanderie, *Le dialogue des romanciers, une*

nouvelle lecture de l'Heptaméron de Marguerite de Navarre, Minard, 1977.

- 3) 拙論、<<Une lecture du *Tiers Livre* le développement par un mouvement circulaire>>、「待兼山論叢」、第19号(1985)、文学篇、pp.33-48。「ボナヴァンチュール・デ・ペリエ『笑話集』の構成について」、GALLIA, XXXI (1991) pp.46-54.
- 4) Claude-Gilbert Dubois, <<Fonds mythique et jeu des sens dans le <<prologue>> de l'*Heptaméron*>>, IN *Etudes seiziémistes offertes à V.-L.Saulnier*, Droz, 1980, pp.151-168.
- 5) Philippe de Lajarte, <<Le prologue de l'<<Heptaméron>> et le processus de production de l'oeuvre>>, IN *La Nouvelle française à la Renaissance*, Slatkine, 1981, pp.397-423.
- 6) Hermenn H. Wetzell, <<Elements socio-historiques d'un genre littéraire: l'histoire de la nouvelle jusqu'à Cervantès>>, IN *La Nouvelle française à la Renaissance*, Slatkine, 1981, pp.41-78.
- 7) Marguerite de Navarre, *Nouvelles*, texte critique établi et présenté par Yves Le Hir, Presses Universitaires de France, 1967, pp. 17-18.
以下『エプタメロン』からの引用は全てこの版により、引用の後に頁数のみ記す。
- 8) *Le Décaméron de Jean Boccace*, traduit d'italien en françoys par maistre Antoine le Maçon, Alphonse Lemerre, 1882, pp.1-6.
- 9) Michel Jeanneret, <<Le récit modulaire et la crise de l'interprétation, A propos de l'*Heptaméron*>>, IN *Le défi des signes*, Paradigme, 1994, pp.53-74.
- 10) 全体の枠を語る者をナラトウールとして、各話の語り手と区別することにする。
- 11) 以下各話は、日をローマ数字で、その日での順番をアラビア数字で表して、略記する。
- 12) *Heptaméron*, p.137. <<Ainsi se font louer par les honnettes hommes, celles qui à leurs semblables se montrent chastes, telles qu'elles sont, mais choisissent ceus qui ne scauroient auoir hardiesse de parler, et qui s'ilz en parloient, par leur ordre et basse condition ne se seroient pas creuz.>>
- 13) *Ibid*, p.279. <<Tant que la bonté et malice regneront sur la terre, elles la rempliront tousiours de nouueaus actes, combien qu'il soit écrit, qu'il n'y a rien de nouueau souz le soleil. Mais nous qui

n'auons été appelez au conseil priué de Dieu, ignorans les premières causes, trouuons toutes choses nouuelles, et de tant plus admirables, que moins nous les voudrions, ou pourrions faire.>>

- 14) *Ibid*, p.192. <<Saffredan connut à la contenance de la plus par des assistans, que cette dispute commençoit fort à les ennuyer, pour ce qu'elle sentoit plus la prédication, que son conte, ne retenant rien, ou bien peu, de la familiarité tant requise ès discours et deuis communs.>>